

女を見下す人気 男の娘インフルエンサー



被害者女子にすべてを奪われ
公開処刑メス堕ち

プロローグ

「ねえ見てよ。僕がいっちばん可愛いんだよ！」
暗がりの中に浮かぶスマホのレンズへ、完璧に計算された笑顔を投げかける。

細く華奢な首筋を傾げながら濡れたような瞳で見つめると、画面の右端を埋め尽くすコメントの奔流が一段と加速した。

『るいび天使すぎる』

『今日も優勝』

『女の子より圧倒的にエロい』

知ってるよ、そんなこと。

間接照明の鈍いオレンジが、乱れたシートと僕の肌を艶めかしく照らし出している。男たちの浅ましい欲望が、投げ銭の数字となつて滝のように降ってくるこの感覚。指先ひとつで何万人もの男の頭を狂わせているという全能感が、背筋を甘く痺れさせていく。

僕の膝の間には、うつ伏せに突っ伏して肩を震わせている女の子。

顔には丁寧なバスタオルが巻かれ、レンズにはその無様な後頭部と、赤く染まったうなじしか映らない。

僕が腰をわずかに沈めるたび、シーツを掴む彼女の指先がキュッと白く強張る。

「ほら、コメント欄のみんなも褒めてくれてるよ？ 僕の引き立て役としては、今日の君、なかなかいい仕事してるんじゃない？」

「……っ、ん……あ、もう、やめ……っ」

「やめて、じゃないでしょ。声が小さい」

わざとらしく耳元へ唇を寄せ、意地悪く囁いてやる。

細い腰をぐっと引き寄せ、逃げ場を塞ぐように下腹部を密着させる。彼女の喉から、押し殺した小さな悲鳴が漏れ出た。

「ひうつ……!!」

「あは、可愛い声。でもダメだよ、まだ配信は始まったばかりなんだから。ねえリスナーのみんな、この子の声、僕の半分も可愛くないよね？ 女の子のくせに、男の僕にこんなに啼かされちゃってさ」

ハーファップにまとめたセミロングの髪を揺らし、フリル付きのミニスカートをたくし上げて、僕は満面の笑顔を浮かべる。

地雷系ファッションで完璧に着飾った僕は正真正銘の『男の娘』。

その肉棒が、本物の女の奥深くまで突き刺さっているという事実が、たまらなく心地いい。

画面の向こうで沸き立つ無数の視線。

女を弄び、そのプライドを足蹴にしながら、自らの美貌を玉座に掲げるこの時間こそが、僕にとって最高の悦楽だった。

「ほら、もつとちゃんとマイクに声を拾わせて。僕の美しさに敵わなくて無様に乱されてるって……全国の人々に教えてあげなきゃ」

腰をゆっくりと、焦らすように揺らす。

シーツの湿った衣擦れの音と、彼女の乱れた息遣いが、重なり合って狭い部屋を満たしていく。

自分は絶対に侵されない。

誰も手の届かない高みから、こうして世界を見下ろしているんだ。

「ねえ、もうちょっと格好のつく声出せないわけ？」

シーツに両手を突かせ、四つん這いに沈めた彼女の細い腰を、両手で容赦なく掴み直す。

湿り気を帯びた空気の中、肉と肉がぶつかり合う鈍い音が小気味いいリズムを刻み始めた。

カメラのフレームから外れないよう、わずかに角度を調整しながら腰を打ちつけるたび、彼女の華奢な背中が弓なりにになる。

「ひぐっ……あ、や……待っ、はやす、ぎる……っ！」

「待って、なんて台詞、僕の配信規約にはないんだよね。ほら見てよ、コメント欄。『ざこまん乙』『男に負けてて草』だってさ。みんな正直でしょ？」
激しく腰を突き入れるたび、僕自身の喉からもふっと甘い吐息が零れ落ちる。

「ん……っ、ふ……あは、締めつけだけは必死じゃん。女の子のプライド、全部そこに集めでもしたの？」

「あ、ああっ……！ もう、無理、ぬいて……っ、お願いだから……！」
タオル越しに漏れる懇願は、くぐもってひどく無様だ。

涙で濡れているのだろう、薄手のパイル地が顔の形に張り付いているのが見えて、嗜虐的な笑みが唇からこぼれる。

許してほしいなら、最初から僕なんか近寄らなければよかったのに。男の娘である僕にマウントを取れるとでも思い上がっていた素人女子が、こうして下半身ひとつで屈服させられている。この情けない落差こそが、極上のエンターテインメントだ。

「やめるわけじゃないじゃん。だって君、僕にDMしてきたとき何て言ったっけ？ 『女の格好した男なんか大したことない』……だっけ？ 僕の可愛いピストン、まだ半分も味わってないのにさあ」

「ごめんなさ……っ、ひっ、ごめん……なさ……っ！」

必死に紡がれる謝罪をあざ笑うように、あえて深く、最奥を抉り抜くような一撃を叩きつけて腰を沈める。ずぶりと急所を突かれた彼女の喉から、タオルを突き破らんばかりの切迫した、迫真の喘ぎ声が漏れ出た。

「ひぐうつ……!? あ、あ……っ、奥、当たっ……てえ……っ！」

熱い蜜壺がぎゅうぎゅうと僕を締め上げてくる感触に、ゾクゾクするような征服感が背筋を駆け上がった。

「そう、そこ。女の格好した男の僕にこんなところ突かれてイキそうになってるんだ？ 恥ずかしくないの？ ねえ」

耳元で意地悪く囁きながら、再び激しく腰を引き、叩きつけるように打ち直す。

ピチャ、と泡立つような水音がマイクに鮮明に拾われ、チャット欄が歓声と下品な煽りで狂ったように跳ね上がった。

僕の吐息と、彼女の乱れきった悲鳴。

カメラの前で繰り返り広げられる一方的な支配の劇に、僕の優越感はどこまでも肥大していく。

指先を伸ばし、シートに散らばる彼女の後頭部の髪を乱暴に掴み上げた。「ひっ……痛っ……！」

「やっぱり、お顔隠したままじゃ配信が盛り上がらないかなあ」
細い首筋を無理やり仰け反らせ、僕自身の腰を一段と鋭く打ち据える。

タオルに覆われたままの顔を、冷徹に光るスマホのレンズへと真正面から向けさせた。

「や、めて……映さないで、顔だけは……っ！」

「じゃあ、ちゃんとお口でお願いしなよ。声、出さないとこのタオル、今すぐ引っ剥がして全世界に顔面ご開帳しちゃうけど？ 何万人もの男たちに、一生消えないデジタルタトゥー刻まれちゃうね」

「っ……そ、そんなの……いや……っ！」

激しく奥を擦り上げる速度を緩めず、耳元へ甘く残酷な吐息を吹きかける。僕の腰の律動に合わせて、彼女の喉から押し殺せない嬌声が掠れて漏れた。 「ん……っ、ふ……僕の腰使い、そんなに気持ちいい？ なら言えるよね。ほら、『無様な雌犬です』って。ルイちゃんの足元にも及ばない、ブスでさこなメスですって……言ってみなよ」

「あ、あ……っ！ い、言えない……そんなの……っ！」

「言えないんだ？ じゃあ、タオル取っちゃおっかなー」

掴んだタオルの端を、指先でわざとらしくぴんと引っ張る。

その瞬間、彼女の全身が恐怖で硬直し、蜜壺がぎゅうと僕を締め上げた。あまりの圧迫感に、僕自身の唇からも「っ……あ……」と情けない吐息が零れ落ちる。いけない、僕としたことがのまれそうになってる。

「言います……！ 言うから、顔は……っ！」

タオル越しに涙と涎がじわりと滲み出し、彼女の震える唇が、己の尊厳を売り渡す言葉を紡ぎ始めた。

「わたしは……っ、無様な、雌犬です……っ！　ルイちゃんの……足元にも及ばない、ブスで……っ、ごこなメスです……っ！」

「あはっ、よく言えましたー」

マイクが拾う乱れた呼吸とシーツの擦れる音。彼女は言葉の途中で小さく息を呑み、力なく背を震わせて僕にしがみつく。プライドを完全に手放した身体の強張りが、僕の胸元へとダイレクトに伝わってきた。

レンズを見つめながら、僕は最高潮の、天使のように完璧なあざとい笑みを浮かべた。

画面の向こうのリスナーに向けて、指先で可愛らしくピースサインを作ってみせる。さらに、ベッドサイドから拾い上げた小型マッサージ機をちらりとカメラのフレームに収め、人差し指を唇に当てて「しーっ」と共犯者の合図を送った。

コメント欄が狂氣的な熱量で一気に跳ね上がる。

言わされた言葉の重みに震え、うつむいたまま動けない彼女。その無防備な腰元へ機械の先端をそっと滑り込ませ、逃げ場を奪うように体重をかけた瞬間、スイッチを入れた。

「——っ嘘、な、に……これっ!?　待って、やだ、止まらな……っ、ああ

あああッ!!」

不意を突かれた振動に、彼女の喉から押し殺せない甲高い悲鳴が零れ落ちる。

重ね合わされた刺激に耐えきれず、完全に脱力した彼女の身体が小刻みに波打ち、シーツの上に崩れ落ちていく。

すべてをさらけ出して力尽きたその無様な姿を見下ろし、僕はたまらず意地悪な笑声を零した。

「だっさあ……あっけなさすぎでしょ」

画面の向こうで狂喜乱舞するコメントの奔流。

足元で泣きじゃくり、誇りを粉々に砕かれた敗者。

「——っ、は……あ……ッ」

引き抜いた切っ先から、熱い白濁が彼女の震える腰元へと勢いよく散る。

シーツの上に崩れ落ちたまま、肩で息をして痙攣している敗者を冷ややかに見下ろし、僕はレンズに向かってこれ以上ないほど甘く愛らしいウイנקを投げてみせた。

「はい、今日の生配信はおしまい。みんな、僕の可愛いメスわからせショー、満足してくれた？」

画面の右半分が、赤や金のスーパードネーションと狂乱のコメントで埋め尽くされていく。

『るいび最高すぎた』

『どこメス完全論破たすかる』

『今日も美貌でねじ伏せてて草』

指先ひとつで配信停止のボタンをタップし、スマホをベッドへ放り出す。暗転した画面に映る自分の顔は、乱れた髪すら計算され尽くした絵画のよう
うに完璧だった。

「ひぐっ……う、う……っ」

足元で顔を覆ったまま、しゃくりあげる情けない声。

ティッシュを無造作に彼女の背中へ放り投げ、僕はふっと嘲笑を零した。
「いつまで泣いてんの？ 僕に抱かれて、何万人もの前で啼かせてもらえたんだから光栄に思いなよ。言つとくけど、僕の引き立て役になれただけアンタの人生で一番輝いてたからね」

返事すらできない彼女を放置して、ルームガウンを羽織る。

女なんて、所詮はこの程度だ。

男の僕が少し着飾り、あざとい声を使い分けるだけで、男リスナーは崇拜し、女は無様に屈服する。世界は僕の美しさを際立たせるための舞台装置でしかない。

鼻歌交じりにシャワールームへと向かう背中には、無敵の全能感だけが満ちていた。

切断された配信の向こう側、静まり返った薄暗い部屋のモニター前で。
一人の少女が、冷え切った瞳で暗転した画面を見つめていた。

手元で光るスマートフォンには、ルイの配信ログと、泣き崩れる被害者たちのチャットグループ。

「……可愛い顔して、よく吠えること」

氷のように澄んだ声が、静寂に落ちる。

細い指先がキーボードの上を滑り、保存された動画データの横に新たなフォルダを生成した。

【ターゲット…ルイ 執行準備完了】

カチリ、とマウスが鳴った。

第一章

「——ねえエリナちゃん、もう終わり？ 熱心なファンって言おうから、もつと骨があると思っただけど」

薄暗い間接照明の下、ベッドに沈み込むエリナを見下ろしながら、僕は勝ち誇った笑みを落とした。

片手に構えたスマートフォンには、会員限定の裏チャンネルの管理画面。先日のホテルで撮影したばかりの動画——『女のくせに僕よりブスなぞこメス、わからせてみたw』が異様なペースで再生数を伸ばし、桁違いの投げ銭がリアルタイムで加算され続けている。

顔にタオルを巻かれ、泣き叫びながら僕に犯されていた前回の素人女子。男たちの浅ましい欲望と大金が画面上で跳ね上がるのを横目で眺めながら、僕は正常位で覆いかぶさり、エリナの細い腰を逃がさないよう組み敷いて再び深く沈め直した。

鎖骨下で切り揃えられた、艶やかな黒髪アッシュのミディアムボブ。無駄な肉のないしなやかで均整の取れた身体に、形の整った胸が荒い呼吸に合わせて上下している。

普段は黒やダークトーンを基調にした洗練された服を着こなし、感情を読

ませない涼しげな切れ長の瞳で人を観察するように見つめてくる大人の女性——それが、僕と会う前の彼女だった。

「っ……あ……っ、生意気、な……男の、くせに……っ」

シートをぎゅっと握りしめる彼女の細い指先。

冷徹で理知的な佇まいはどこへやら、紅潮した頬と微かに震える唇が、僕の攻め手ひとつで情けなく歪んでいる。

跳ね上がる数字の残高を確認しながら、僕は顔が映らない絶妙なアングルでカメラを向け、耳元へ意地悪く囁いてやった。

「ほら、エリナちゃんのこの無様な声も、次の動画でいい稼ぎになりそうだな。……ねえ、動画を見てくれるみんなにも教えてあげなきゃ。この子、裏垢じゃ『男の娘なんてオモチャにできる』って偉そうに豪語してた、ツンとした年上のお姉さんなんだよ？ 普段はひんやりした指先で人を品定めして、クールぶってたのにさ」

無防備に乱れた彼女の胸元に指先を滑り込ませ、焦らすように爪先で弄びながら、ぐっと奥へ腰を沈める。

不意を突かれたエリナの喉から、切迫した声が零れ落ちた。

「ひうつ……!? や、そこ……ッ、急に、強く……っ！」

「あは、クールぶってたハスキーボイスはどこ行ったの？ 感じてる声、すっごく高くて可愛いじゃん」

意地悪く耳元で囁き、逃げ場を塞ぐように体重を預けて強烈に煽り立てる。相手がどれだけ澄ました大人の仮面を被っているかが、的確に主導権を握ってやれば、こうしてただの無力な姿に成り下がる。

「ほら、スマホのレンズに今の声、すっごく綺麗に拾われてるよ？ 男の僕にこんなに啼かされちゃって、どんな気分？」

「あ、あ……っ！ こんな、ガキに……っ、悔しい、のに……ッ！」

抗えない昂ぶりに吞まれ、彼女はついに背中をしならせて小刻みな震えに身を委ねた。

自分を特別だと思い込み、上から見下ろそうとしていた女を、こうして完璧に屈服させる瞬間。その支配の感覚こそが、僕のプライドを最も甘く満たしてくれるのだ。

撮影を終え、スマホの録画ボタンを止めた僕は、満足げな笑顔で彼女に告げた。

「ふう……お疲れ様。いい声で鳴いてくれてありがとね、エリナちゃん」

身体を引き抜き、シーツの上に腰を下ろして息を整える。

汗ばんだ肌にエアコンの風が心地いい。スマホの録画を止め、極上の戦利品を手に入れた優越感に浸っていると、ベッドから身を起こしたエリナが、乱れたシャツの胸元を整えながら静かに立ち上がった。

息こそまだ微かに乱れているものの、その横顔には先ほどまでの嬌態が嘘のように、冷やかな静寂が戻っている。

「……本当に、口だけじゃないのね。大したテクニクだわ」

「でしょ？　僕に抱かれた女の子はみんな、女でいるのが嫌になっちゃうんだよ」

鼻を鳴らして誇らしげに笑う僕に、エリナはミニ冷蔵庫から取り出したグラスを差し出してきた。

結露したグラスの向こうで、琥珀色の液体が揺れている。

「お疲れ様。喉、渴いたでしょ。冷たいハーブティー、淹れておいたから」

「あ、気が利くじゃん。喉カラカラだったんだよね」

素直に受け取り、口をつける。ほのかに甘く、ミントの清涼感が火照った喉をすっきりと潤していく。

グラスを一気に煽り、ベッドのヘッドボードに身を預けた。

次の動画のタイトルはどうしようか。『澄ましたインテリ女子、男の娘の腰使いに完全敗北』なんてどうだろう——そんな暢気な思考を巡らせていた、その時だった。

「……あれ……？」

指先から、急速に感覚が抜け落ちていく。握っていたはずのグラスが、シーツの上にことりと鈍い音を立てて転がっ

た。

「え……なに、これ……手、が……？」

起き上がろうとした瞬間、視界がぐにやりと歪んだ。全身の骨が抜き取られたかのように重く、鉛のようにベッドへ沈み込んでいく。舌が強張り、まともな呂律すら回らない。

「っ……え、り……な……？」

霞む視界の先、仁王立ちになったエリナが、グラスを見つめる僕を静かに見下ろしていた。

その瞳には、先ほどまでの快楽の残滓など微塵もない。

あるのは、獲物を罠に追い詰めた狩人特有の、底知れない冷たさだけだった。

「ごちそうさま、ルイ君。男としての自信、たっぷり味わわせてもらったわ」
氷のように澄んだ声が、遠のく意識の隙間に滑り込んでくる。

「……でも、それも今日で終わり。次に啼くのは、あなたの番よ」

抗おうと伸ばしかけた指先が力なくベッドへ落ち、僕の世界は暗転した。

まぶたの裏に焼きつくような頭痛とともに、重い意識が浮上する。

ぼやけた視界に映ったのは、見慣れたはずの自分の部屋の天井だった。けれど、何かが決定的に狂っている。腕を動かそうとした瞬間、手首に食い込む硬い感触に息が止まった。

「……っ!? な、にこれ……!」

両手首を頭上のスチールフレームへ、両足首を左右のベッドの縁へとがちりと革ベルトで固定されている。

逃げ場を完全に塞がれ、大の字というよりは――誰かを迎え入れるような、無防備きわまりない正常位の姿勢を強要されていた。

上半身は、フリルとレースをあしらったいつもの地雷系ブラウスを身にまとったまま。

けれど、たくし上げられたスカートの下にはショーツの一枚すらなく、腰から下は完全に剥き出しだった。

可愛らしく着飾った服の裾から、男の証であるペニスが無残に晒されている。

「目が覚めた？ 意外と早かったね」

ベッドサイドの革張りのチェアに腰掛け、脚を組んだエリナが、手元のスマホの明かりに照らされていた。

さつき僕の下で艶めかしく乱れていた女と同一人物とは信じられないほど、その眼差しは冷徹で、感情の色をまるで宿していない。

「エ、エリナちゃん……？　これ、何の冗談？　痛いよ、早く解いてよ……っ！」

強気に怒鳴りつけようとした言葉は、手首を締めつける冷たい金具の感触に怯えて喉の奥で詰まった。

まずい、完全に主導権を握られている。

瞬時に思考を巡らせ、僕はいつもの『武器』を取り繕った。瞳を潤ませ、唇を尖らせて、画面越しのオスたちを骨抜きにしてきた最高にあざとい猫なで声を絞り出す。

「ねえ、エリナちゃんってば……さつきはちよつと意地悪すぎたかな？　ごめんね？　ルイ、反省してるよお……だから、ね？　痛いのやだよお……」

「ふふ、さすが人気インフルエンサー。演技の切り替えだけはプロ並みね」だが、エリナの口元に浮かんだのは嘲笑だけだった。

彼女は立ち上がり、ゆつくりとベッドへ歩み寄ると、手にしたスマートフォン画面を僕の目の前に突きつけた。

「……え？」

そこに映し出されていたのは、見覚えのある鍵付きの裏フォーラム。

僕がこれまで顔を隠してハメ撮りし、『ざこメス』と罵って動画を晒して

きた女の子たちのリスト。泣き寝入りしたはずの彼女たちが集まり、僕への
怨嗟と復讐の言葉をびっしりと書き連ねていた。

その管理者アカウントのアイコンが、エリナのもものと完全に一致している。
「これ……っ、お前、最初から……!」

「そうよ。可愛い顔して女の子を食い物にして、男のオモチャにして稼ぐイ
キリ男の娘。……今度はお前が啼く番だよ、ルイ」

甘えた猫なで声など、彼女の前では一枚の紙ほどの防壁にもならなかった。
エリナはポケットから取り出した冷たいローションをたつぷりと手に取
り、僕の無防備な脚の付け根、閉ざされたお尻の穴へと容赦なく塗りたくっ
ていく。

「ひゃっ……!? つ、冷たっ……やめろ、何すんだよ!」

「男のくせに、女の子を散々イかせてマウント取ってたんでしょ? なら、
自分の後ろがどれだけ敏感かも……ちゃんと教えてあげる」

ヌルリと滑るエリナのゴム手袋をはめた指先が、躊躇なく窄まりの入り口
を押し広げる。

そして、もう片方の手には、黒いシリコンバイブ。

「待っ、おい、ふざけんな! 入るわけないだろ、そんなの! やめろ、や
めろってばあッ!」

「声が大きい……入るわよ、お前みたいなふしだらな身体ならね」

ギリ、と異様な圧迫感が窄まりを押し広げて侵入してくる。

未体験の異物感に息が詰まり、腹の底が引き絞られるような恐怖に全身が粟立った。

「ぐ……っ、あ……ッ、やだ、抜いて……！」と叫びかけた、その刹那。

カチリ、と手元のスイッチが押された。

「——っつつっ!」

声すら出なかった。

アナル深くに沈み込んだ黒い塊が、重低音を響かせながら凶悪な振動を開始する。

ただ震えるだけじゃない。内部の肉壁を、未知の急所を、正確に捉えて内側から電撃のような衝撃で抉り抜いてくる。

「ひぐっ……!? あ、なに、これ……っ、あたま、真っ白に……っ!」

「へえ、いい顔するじゃない。まだ最弱モードなんだけど?」

指一本触れられていないはずの僕のシンボルが、下腹部の奥を突き上げる激震に連動して、ビクビクと情けなく跳ね上がり始めていた。

「ふざけ、んな……っ! 男の僕が、後ろで……感じるわけ、ないだろ……っ!」

歯を食いしばり、必死に喉から絞り出す。

そうだ、僕は男だ。今まで何人もの女を啼かせてきた側だ。こんな異物で、

後ろの穴を弄られたくらいで屈服するはずがない——そんな最後の虚勢は、エリナの冷酷な指先ひとつであっけなく打ち碎かれた。

「口だけは達者ね。じゃあ、ここは？」

ぐに、とアナル深くに埋まった黒い塊が、わずかに角度を変えて斜め上へと押し上げられる。

その先端が、下腹部の奥深く——未知の突起を、ピンポイントで強烈に圧迫した。

「——っつあッ!？」

脳天を雷で打ち抜かれたような衝撃が走った。

背筋がバネのように跳ね上がり、ベッドのスチールフレームがガシャリと悲鳴を上げる。

痛いんじゃない。熱い。痺れる。今まで女の子の身体を奪ってイカせていた時に感じていた絶頂の、何十倍もの質量を持った快楽の津波が、内側から爆発したように溢れ出してくる。

「ひゃうっ……!? なに、これ……やだ、やだあっ! 止めて、奥、当たってるうッ!」

「止めるわけないでしょ。ほら、見てみなよ。お前の窄まり、バイブを逃がさないようにぎゅうぎゅう吸い付いてる。まるで男のモノを欲しがるメスそのものじゃない」

エリナの低く澄んだ声が、冷酷な実況中継となって耳元に突き刺さる。彼女は手元のスマホのカメラを起動し、僕の腰元へピントを合わせた。

「触ってもいないのに、お前の可愛いおちんちん、先端から先走り汁をばたばた垂らしてピクピク跳ねてるよ。お尻の穴がキュウキュウ締まるたびに、ビクッ、ビクッて……恥ずかしいくらい素直に反応してる」

「言わないで……っ、見ないでえ……ッ！ あ、あぁっ、おかしくなっちゃう、頭、とけりゅ……っ！」

パイプの振動が強まるたび、射精の瞬間の痺れだけが途切れず、永遠に押し寄せてくるような狂乱の感覚。

一度の絶頂で終わらない。波が引く間もなく次の大波が前立腺を直撃し、息を吸うことすら許されない。

そんな僕の無様な姿を見下ろし、エリナはくすつと冷ややかに唇を綻ばせた。

すつと伸ばされた手が、乱れたブラウスの胸元から容赦なく滑り込んでくる。

「ひゃっ……!?!? な、に……っ」

冷たい指先が、小ぶりに尖った突起を捉え、爪先でカリカリと小気味よく引っ掻いた。

下腹部を貫く激震に加えて、胸元へ走る不意の電撃的な刺激。背筋がバネ

のように跳ね上がり、喉から押し殺せない艶めかしい悲鳴が一段と甲高く跳ね上がった。

「ひぎいっ……!? あ、や、胸……やだあッ!」

「あは、いい声。やつぱり男の娘を気取ってるだけあって、胸もすっかり開発済みってわけね。こんなに敏感に尖らせちゃって」

「やめ……やめてっ、お願いだから……っ!」

顔を真っ赤に染め、涙に濡れた瞳で必死に首を振る。

これ以上弄られたら、男としての最後の理性が本当に焼き切れてしまう。けれど、僕の必死の懇願を前にして、エリナの瞳には底知れない冷酷な光が宿るだけだった。

「やめて、ねえ……。そうやって泣いてすがりついてきた女の子たちを、あなたはもうしたっけ?」

冷たい声が耳を打った瞬間、指先が突起を根元からぎりっと挟み込み、容赦なくねじりながら上方へと引き絞った。

「——っっっあッ!」

引き裂かれるような痛みと、芯から痺れるような強烈な快感が同時に脳天を直撃する。

後ろを扶られ、胸を引き絞られ、逃げ場のない上下からの責め苦に、背中が弓なりに張り詰めた。

見開かれた、焦点の合わない瞳から涙がボロボロと溢れ出る。唇の端からは止めどなく涎が垂れ、計算尽くの「可愛いいるいぴ」の面影など、もうどこにも残っていないかった。

「ほら、女の子たちを散々バカにしてたんだから、自分もちゃんと言葉にしてごらんよ。誰がどうなってるの？」

「やあつ、もう、無理い……っ！ るい……るいのお尻、イッちゃううつ！ お尻で、イッちゃうのおおッ！」

自ら尊厳をかなぐり捨てた瞬間、下腹部の奥がカッと閃光のように熱を放った。

「あひいっ——ッ！」

シンボルに指一本触れられていないのに、先端から勢いよく白濁と透明な蜜が噴きこぼれ、僕の腹部とシーツを汚していく。

ビクビクと激しく痙攣する身体。窄まりはバイブを締め上げたまま、快感の余波で無様にヒクつきを止められない。

「……ふふ。すっごい顔。すっかり高画質で撮れちゃった」

エリナがバイブを弱へと切り替え、スマホの画面を僕の濡れた瞳の前に突きつける。

そこに映っていたのは、白目を剥きかけ、涎を垂らし、下半身を汚して喘ぐ——完全なメスに堕とされた僕自身の姿。